

標本レスキューの課題

津波で被災した植物標本を元の状態に復元することは、これまで国内で誰一人経験したことがありませんでした。世界でも初めてかもしれません。救済を引き受けたどの博物館でも作業は手探りでしたが、それぞれがホームページなどに手順を紹介する記事を載せ、お互いがそれらの例を参考にしながら修復作業を進めてきました。

このような標本修復に関するノウハウの蓄積は大切なことで、ホームページ、Eメールによる情報網など情報技術の手助けがなければ、今回ほど迅速でかつ適切な修復作業はできなかったのではないかと思います。

今回の地震・津波では陸前高田市博以外にも多くの博物館施設が被災しましたが、個々の被害状況はすぐにはわかりませんでした。標本についても、何がどのような被害を受けたのか、情報はなかなか伝わってきませんでした。陸前高田市博の場合、標本の被災状況がわかったのが津波にあってから1カ月以上も後だったことで、その間に標本劣化がかなり進行したものと思われます。

大きな災害時に自然史標本の迅速なレスキューが行われるためには、どうすればいいのでしょうか。

標本類の被災状況を早く知るためには、博物館関係者の横の連携により情報収集に当たる必要があります。被災地以外の博物館関係者にも、どこにどのような標本があるか、情報収集できるシステムが必要です。

今回の地震・津波では多くの文化財も被災し、国宝や重要文化財など指定文化財を中心とした文化財レスキューが文化庁の主導により開始されています。一方、自然史標本については情報が少なく、レスキューは思ったほど進んでいません。

地域の歴史文化は故郷の復興・再生を進めるうえで住民の心のよりどころとなるものですが、そういった地域の人々が作り上げてきた文化は、地域の自然環境や風土のうえに成り立っているものです。地域の自然を物語る自然史標本は大切な郷土の誇りといえるもので、積極的に修復・復元、維持していかなければなりません。

多くの人にそういった自然史標本のもつ意味や重要性を知ってもらうことは、今後も起こるであろう大規模災害時の実効性のある自然史標本レスキューにつなげるうえで、とても大切なことです。そしてこれは博物館が負わなければならない重要な責務でもあります。

最後になりましたが、被災した博物館施設などの復旧と標本類の修復が進み、被災地に一日も早く元の生活が訪れますようお祈り申し上げます。

